

平川克美

ひらかわ・かつみ ●1950年生まれ。文筆家、詩人。喫茶店「隣町珈琲」店主。近著に『株式会社の世界史』『寓理』と『戦争の5000年』（東洋経済新報社）など。

詩をめぐる鼎談

詩のない
生活にも、
実は
詩がある

小池昌代

こいけ・まさよ ●1959年東京都生まれ。詩人、小説家。アンロジイ詩集の編集なども手掛ける。近著に詩集『赤牛と質量』（思潮社）、短編小説集『かきから』（幻戯書房）など。

佐々木幹郎

ささき・みきろう ●1947年奈良県生まれ。詩人。評論やエッセイ、詩と音楽とのコラボレーションなど、幅広く活躍。近著に詩集『鏡の上を走りながら』（思潮社）、エッセイ集『猫には負ける』（亜紀書房）など。

七十歳で詩人宣言

平川 僕が責任編集というかたちの『望星』の詩特集は今回が二回目なんですけど、なぜまた詩の特集をするのか。鼎談を始める前に、まずはそのへんの動機からお話ししようと思います。

一回目のとき、僕は詩人でもなく、積極的な詩の読者でもなく、ただなんとなく詩が好きだけだったんです。しかし、政治状況をみていると、どうも言葉が破壊されているという印象が強く、もう一度言葉について考え直してみたいということがありました。

そのころ出した『言葉が鍛えられる場所 思考する身体に触れるための18章』（大和書房）という本が、日々の身辺雑記のようなエッセイの後に、当時の状況と関係の深い詩を載せ、エッセイと詩がパラレルに響き渡るようにした一冊だったですね。

なぜそんなタイトルにしたのかというと、内田樹との共著『東京ファイティングキッズ』を、小池さんがNHKの「週刊ブックレビュー」という番組で紹介してくれたときに、「言葉が鍛えられる場所は、言葉が

いちばん通じない場所だ」という部分を取り上げてくれたんです。それでもう一度、「言葉が鍛えられる場所」について書いてみたかったのです。

そして、「言葉が鍛えられる場所」を、実際に『望星』の誌面で実現したいという気持ちがありました。

そんなことが『望星』での一回目の詩の特集の動機で、きっかけになった小池さんにアドバイザーとして参加してもらいました。今回はもう少し本格的に特集を組んでみたいということで、佐々木さんにもお願いしたいということになりました。

佐々木さんと僕との出会いは、実はツイッターなんです。ツイッターに、佐々木さんの第一詩集『死者の鞭』の一節である「名乗れよ歳月」と書いたことがあるんですが、そうしたら佐々木さんからすぐに「往事茫茫」と反応が来た。

佐々木 その前に、僕は平川さんの本を二冊くらい読んでいたんですが、その平川さんがそう書いているのを見て、思わず返信したんです。

平川 人生、何が起るか分からない。だって、学生時代の僕にとって佐々木さんはある意味スターで、渋谷のクラシック音楽喫茶「ライオン」で、佐々木さん

の詩を必死になってノートに書き写したりしていたんですから。

僕はビジネスの世界に足を踏み入れて以来、何十年も詩からは遠ざかっていたのですが、『言葉が鍛えられる場所』を書いたり、詩の特集をやったりして、少しずつ詩のほうへ戻ってきたわけです。そして七十歳になって漸く「自分でも書いてみるか」という気持ちになったんですよね。それで、この気持ちをもう少し鮮明にしたいということで、とりあえず詩人宣言をしてみよう。

佐々木 詩を書く前に、詩人宣言をしたんですか？

平川 逃げ道をすべてふさぐという意味で、「詩人宣言」という詩を書いたんです。

詩人宣言

おれがその男と落ち合ったのは
落合という喫茶店だった

回転ドアを開けると

その男は無心で本を読んでいた